

「自らを誇らず」

小川 巖

エコ・ネットワーク代表

松井先生とお付き合い頂いた期間は30年余り。それが長かったのか短かったのか。ひとつだけ言えるのは、公私にわたり大変お世話になったことだ。書き残しておくべき話題は沢山あるのだが、ここではふたつのエピソードを取り上げるにとどめ、そこから先生の人となりを感じとって頂けたらと思う。

松井先生に初めてお目にかかったのは、昭和59年秋だったはずである。北大の大学院に在籍していた私はモズとアカモズの種間関係を研究テーマに、フィールド調査に明け暮れていた。両種ともに夏鳥として春になると北海道に渡来する。ある地域で両種が同じ環境を巡って競争的な関係になる。その関係こそ私のメインテーマであるの言うまでもない。研究も後半に入ると、直接的な競争というよりは、むしろ共存的な関係が見えてきたような気がした。そうなる、非繁殖期の生活も両種の生態を考える上で重要になってきた。モズは本州で越冬している、取り組みやすい。実際私は昭和47年冬から静岡県磐田市をフィールドにモズの冬期調査に入っていた。そうなる、残るはアカモズの越冬地だけである。文献によると、アカモズはマレー半島、インドネシア等で越冬している、とある。ある時行く決心を決めた。今のように格安航空券がある時代ではない。数ヶ月の滞在になるといろいろ面倒な手続き、準備が待ち受けていた。面倒な準備のひとつにマラリア対策があった。その相談を竹田津実さんに持ちかけたら、いとも簡単に

「ああ、それなら松井先生のところへ行けばよい」

と事もなげに仰る。先生のお名前はそれ以前にも伺っていたものの、それまで接点があった訳ではなく、もちろん面識もなかった。

「そうは言っても、全然会ったこともない人ですし」

とやや腰の引けたようなことを言ったはずである。何しろ30年以上も前の出来事だ。詳しいやり取りは覚えていない。次の記憶は、私が先代の桑園中央病院を訪ねた所まで飛んでいる。恐らく竹田津さんが連絡をしてくれたのだろう。

忙しい診療の合間に初対面の私に快く会って下さった。これからお世話になるのだから、ウィスキーを1本携えていったように思う。その時にどんな話をしたのかまでは覚えていない。しかし、それまで怪我や病気で職業的に医者と接した経験はいくらでもあったものの、個人的に医者と接するのは初めてで、しかもこんな気さくに初対面の男に話をしてくれる先生がいようとは、とむしろ驚きの方が大きかった。帰りがけ

「道路の向かいの住宅に寄ってらっしゃい」

と言われ、臆面もなく目と鼻の先にある先生のご自宅に顔を出した。何とそこでお数を数本頂くことになった。嬉しいやら面映ゆいやら。酒1本でその数倍以上をザックの中にマラリアの薬と一緒に詰め込み、更に一升瓶を両脇に抱え研究室までは天に昇る気持ちで急いだ。20年くらい経ってから先生にその時の話をしたことがある。

「そうだったかなあ」

と言うばかりで、本当に覚えていないようであった。

もうひとつのエピソード。10年前になるはずだ。札幌駅北口のキャノンサロンで先生の写真展が開かれた。道新から出版された写真集を記念した写真展だった。数十点のパネルは白鳥のやさしげな姿を写したものが多い。先生の前ではハクチョウが嬉しげに演技をしているかのようだ。そういった写真の中に異色なのが隅の方に1点あった。A4サイズ位でしかも白黒である。

よく見ると雪原の中に白鳥が小さくポツンと写っているだけ。気になっただけに、後日開かれた懇親会の席であの写真についてお聞きしてみた。

「ボクが白鳥の写真を撮り始めた頃は、なかなか白鳥が近くに寄ってくれなくて、匍匐前進をしながらようやく撮ったのがあれだった」

今や白鳥が人前に現われるのは普通の光景である。わずか30～40年前の白鳥があんなに遠い存在だったとは。あの1枚の写真は白鳥と人間の関係を何よりも如実に物語っている。それをさりげなく地味に掲げ、そっとアピールする先生の白鳥に対する心情を感じない訳にはいかなかった。その時改めて感じたのは「自らを誇らず」という一貫した姿勢である。

この姿勢こそ先生から正しく受け継いでいきたいと私は密かに思った。